

新規知見の乏しい皮膚疾患

編集担当 浅井 俊弥

臨床免疫学はここ20年ほどで飛躍的に進歩し、数多くの疾患の病態解明と治療薬の創出に寄与した。皮膚科領域においても尋常性乾癬、アトピー性皮膚炎の新規治療薬が続々と上市され、重症患者のQOL改善に大きく貢献した。しかし一方でそういった進歩から取り残され、解明されないままの疾患が日常的にあると感じている読者、とくに開業医の先生は少ないのではなかろうか。

今回は「新規知見の乏しい皮膚疾患」というチャレンジングなテーマを掲げた。私が皮膚科医になった昭和の時代から、平成、令和と30年以上が経過したいまも、研修医のころと変わらない説明を余儀なくされている疾患を集めようと考えた。しかし、取り上げたい疾患の「臨床例」は、学会発表された抄録からの選択だけではまかなえないとの考えから、多くのアドバイザーの先生方に経験例の報告をお願いした。当誌だからこそ達成できた、アドバイザーの力が集結した本号を、ぜひ一読していただきたい。アドバイザーの先生方には改めて御礼申し上げます。

さらに、本誌の創成期から長きにわたって編集に携わっていただいた西山茂夫先生、栗原誠一先生との座談会も実現することができた。座談会はたいへん楽しく、気がつけば4時間が経過していた。書き起こしにも苦労したのではないかと思う。編集部のスタッフにも感謝したい。

個々の「臨床例」には、とくに病態、原因について、既報告の推論に加えて、著者の現時点での考えが述べられている。取り上げた疾患にはcommon diseaseも多いので、とくに開業医の先生方の日常診療に役立つのではないかとと思われる。今後、本号で取り上げたような新規知見の乏しい疾患について、その病態解明に興味をもち、独創的な視点から調査、研究を進めていく若手皮膚科医が本誌読者から育ってくれることを期待している。